

川柳と狂歌

桑原 正紀

今年も「サラリーマン川柳」の優秀百選が発表された。
相変わらずおもしろい。

効率化進めて気づく俺が無駄 さごじょう
飲み会で上司の隣ゆずりあり 逃げ松

1日の嫁との会話9秒台 レッドライオン
電子化について行けずに紙対応 トリックキー

時代の状況や空気、人間関係などをエスプリとユーモア
を交えて十七音で表現する技。これも「クール・ジャパ
ン」の一つであろう。

ただ気になるのは、兄貴分の狂歌はどうなったのかとい
うこと。

歌よみは下手こそよけれ天地の動き出してたまるもの
か は 宿屋飯盛

太平の眠りを覚ます上喜撰 たつた四杯で夜も眠れず

作者不明

いま読んでもなかなかおもしろい。それでは現代ではど

うかとネットで検索してみると、狂歌とおぼしき自作をア
ップしている人がいないわけではない。

日産に諸行無常のカネが鳴る ゴーン、ゴーンと虚し
く響く 石川ノラネコ

やるではないかと思う反面、これが川柳のような拡がり
や盛り上がりには繋がらないのはなぜかと考えてしまう。

川柳が大衆を魅了するのは、その凝縮度と直感性ではな
かるうか。狂歌はその点、知識や教養を背景としたりして、
おもしろさに辿り着くまで微妙に時間を要する。さらに、
狂歌には少し文学的な深みやひねりを加えると立派な短歌
作品に昇格する可能性もある。つまり、狂歌は衰退したの
ではなく、エスプリやユーモアを利かした作品として、現
代短歌の中に生き継いでいるとも考えられるようだ。

「コスモス」本号より、その好例。

読み問題好きと言ふひと新春のテレビのクイズ(陸蓮
根)に黙る 森田治生

自動車もやつと名前に追いつくか生まれて二百年ほど
が経ち 同

高野公彦さんにも自己を戯画化した狂歌風の歌がある。

高野にはちよつと優しくしてあげて飲ませてごらんあ
つばらばあとなる 『水苑』

このように、狂歌は現代短歌の中に融け込んで、その幅
を拡げる要素の一つとして働いていると思うのである。